

に帰化している由で、今回、我国で始めて野外で見出されたわけである。

次ぎの一品は、大分毛色の変わったヤブジラミ類似のもので、株元より分岐し、草丈 15—30 cm 許に達し、図 2 の如く葉液より長花梗（今回の採品では約 7 cm 許）を出し、草姿の割には大形の白花をつける。本種もやはり欧州原産の *Caucalis daucoide*s Linnæus で、前述の如き顕著な花弁に因んで、これをハナヤブジラミと呼ぶこととする。なお、上述の 2 種は共に、筆者が 1951 年 5 月及び 6 月に、神奈川県藤沢市附近の荒蕪地で見出したものであるが、その後消失した模様で、これらも所謂 temporarily naturalized plants に属するものであろう。終りに、文献等について種々成示載いた、東大の原寛博士に厚く御礼申し上げる次第である。（東京歯科大学）

* * * * *

Torilis leptophylla Reich. f. and *Caucalis daucoide*s Linn., both native of Europe, recently introduced to Japan as an alien weeds. These plants were found in arable sandy land of Fujisawa City, Prov. Sagami (Kanagawa Pref.).

○再び壱岐島産キビヒトリシズカについて（品川鉄摩）Tetsuma SHINAGAWA : Supplement notes on *Chloranthus Fortunei* (A.Gray) Solms of Isl. Iki

私は昨年（5 月）の 5 月、壱岐の石田村でキビヒトリシズカの新産地を発見し、その変異の状況を中心に調査報告した（本誌 38: 29）が、今年は壱岐の全域を踏査して 5 群落を発見し、さらに精しく変異の様子を調べたので、他の観察事項とあわせて報告する。

1) 発見の新群落。a. 壱岐南部の郷の浦町初山の林縁。b. 壱岐南西部の同町渡良の墓地とこれに続く山足で、2600 余本を数える最大の群落。c. 壱岐西部の同町沼津の路傍で、約 200 m と 30 m を隔てた群落。以上は同一の町内ではあるが、旧 6 町村の合併町で、群落はたがいにかなり遠くはなれている。昨年見つけた石田村のものと合せると 6 群落となるが、地質のうえで、壱岐を北西南東方向に走る構造線（地質調査所：地質図説明書）を境に、その南半だけに分布し、北半に全く見ない。

2) 苞。昨年の調査で、苞の分裂状態に変異を認め「苞には 3 裂品のほか 2 裂品がかなり多く混じり…」と報告したが、今回の調査で一層たしかになった。対象は最大の前記の b. であるが、環境条件も考え肥沃地・やせ地・陽地・陰地・極陰地の 5 地から、それぞれ 10 花穂ずつ、総計 50 花穂をとった。調査は便宜上 3 裂について行なった。

これによると、壱岐産のキビヒトリシズカの苞は、2 裂品が主で 3 裂品がやや多く混じる程度であることがわかり、記載の 3 裂にくらべ、2 裂えの変異の起きたもの（逆に 3 裂えの変異過程）と考えられる。また環境条件では、肥沃地のもの（發育良好）は、やせ地のもの（發育不良）より、3 裂品が多くできる傾向のあること、日照の度合はこのことにほとんど影響のないことなどがわかる。つぎに 2 裂苞と 3 裂苞の関係である



図1 (左). 郷の浦渡良にあるキビヒトリシズカの大群落の一部。要求が似ているのであろう、根もとにはヤブタビラコがぎっしり生えている。4月24日うつす。 図2 (右). 昨年庭すみに移植したキビヒトリシズカの満開の状態。4月17日うつす。

が、沢山な苞の観察の結果からこれを見ると、2 裂品が古型のように考えられる。苞はみな外がわ（背面）に、苞のついているところから先端に向かって左右2条の明りような隆起があり、その先はそのまま苞の2裂片の先端となっているのに対し、3 裂品は2条の隆起にはさまれた溝の端の、うすい膜のへりから発生し、左右どちらかに片寄って、形のととのわぬものも多く、また中央から発生したものも、小さい突起程度のものからふつうの3裂品まで、大きさや形がさまざまで、中央の裂片は後生的（二次的）のものであるとの印象が強い。

3) 花. キビヒトリシズカの花には一種特有の香気がある。花糸は花穂を包んでい

比較 事項	3 裂苞の比率		3 裂苞の範囲		備 考
	総花数	比 率	最低の穂	最高の穂	
環境					50 花穂について
肥 沃 地	228	39%	19%	68%	(総花数——950 3 裂品の比率——31.5%)
や せ 地	128	26	0	63	
陽 地	176	30	20	39	(3 裂品が 50% を越す花穂——6 個 2 裂品だけの花穂——1)
陰 地	198	31	10	36	
極 陰 地	220	26	22	35	

る葉の開きはじめてから、10 日余りの間は緑色であって、その後純白になるという特性がある。また花穂は花後たいては側方か下方にまがり、おそくまで立っているヒトリシズカと異なる。花の大きいことは本種の特徴の一つであるが、雄蕊をその着生する子房の肩から引きはなし、多数のものを測定したが、側枝や發育不良の花などに多少の例外はあるが、大部分 10 mm 以上で最長 18 mm まであって、記載に符合していることがわかった。私は前回の調査にあたって、花糸の長さだけを測定するという誤ちを犯したことに気づいたので、ここにおわびして訂正します。

4) 葉. ヒトリシズカは葉の表面に光沢があるが、キビヒトリシズカにはない。

5) 茎. 春、地上に芽を出した頃は、キビヒトリシズカはヒトリシズカと同様に、茎や葉柄や葉脈が帯暗紫褐色であるが、次第に淡くなって、落花後は節と葉柄の茎部を除いて淡緑色となり、ヒトリシズカの帯紫色のままであるのと著しく異なる。

(長崎県壱岐郡郷の浦町)

〇“デジマノキ”について(外山三郎) Saburô TOYAMA: *Agathis alba* Foxw. cultivated in Japan

長崎の出島は旧幕時代オランダ人を隔離居住させるため、長崎港内に築造された扇形の人工島である。明治になって、その前方が埋立てられて、今は完全に陸続きとなり、昔のおもかげは、ほとんど残っていない。そして現在 この旧出島の一角に朝永外科病院があって、その庭先に一本のナンヨウスギ科の *Agathis alba* Foxw. がある。高さおよそ 9 m、目通り幹囲 1.10 m で花はつけないが樹勢はよい。この樹の原産地はインド、ジャワ、フィリピンなどである。現在の朝永病院の建物の一部は安政開国後、慶応か明治初年に英国人が建てた数会の一部で、朝永氏の先代が大正 12 年、英国領事館より購入して転居したものという。朝永氏先代の未亡人の談によれば、この樹は転居当時と余り変らぬ大ききで、旧幕時代オランダ人によってジャワあたりからここに持ちこまれたものといわれていたという。これこそ、日蘭文化史に残る出島の記念樹として貴重な存在である。上原敬二氏の樹木大図説によると、ポイテンゾルグ植物園に径 1 m のこの樹の並木があって有名、和名はマニラコパールノキという意味が述べてある。また、佐藤正巳氏の書かれたものによると、同じジャワのボゴール植物園に、かつての園長タイスマン氏が、日光の杉並木に模して作ったこの樹の壮大な並木があるという。私は、この樹に新しくデジマノキの名を与えて出島の記念樹の保存を考えたいと思う。種名のご教示をいただいた初島住彦氏に感謝する。(長崎大学学芸学部生物学教室)